

追悼

大林宣彦

(享年82歳)

村上 暁 スタッフ

大林監督の新作、『海辺の映画館 キネマの玉手箱』を観てぶっ飛んだ。なんとというパワー、エネルギー、情熱。余命幾ばくかの老人が作ったとはとても思えない、凄まじい生命力が宿った映画。今の日本、まさに敗戦の反省を忘れた愚かな日本人に対する叱責のようなパワーを感じた。

戦争とは何か、人と人が殺しあうとはどういうことなのか。経験せずに済めば越したことはないが、経験しないと今のような差別、偏見にあふれ、「日本すごい」に酔いしれる愚かな日本人が出来上がる。絵空事だが、自分ごととして経験できる「映画」にか



ける情熱が溢れ出ている。

過剰な説明、字幕。もはや「感じ方は観客それぞれだよ」なんて乙に澄ましている余裕などない。そんなことでは、「戦争に間に合わなくなる」からだ。

歴史的な事件が現在の私たちにつながる意味。歴史により、大きな悲劇が生まれる事実。「過去のことなんて勉強してなんの意味があるの？」という問いに対する答えがある。

劇中には頻繁に中原中也の詩が挿入される。大林監督が愛した文学、まさに純文学映画の宣言。歴史の醜い部分も正直に伝えること、契約書を読む力よりも文学を楽しむこと。監督が願う、次の世代に学ばせたいことだ。空腹を満たすよりも、教育を施すことの大切さも、「この空の花」に続き訴えられていた。

歌や踊りでポップに展開する前半から一転、敗色濃厚となった時代を描く後半では、軍による性暴力も描かれる。極限状態の男たちが、性欲にかられた男たちが、どれだけ醜いことを行うか。犠牲になるのは常に弱者。ハラスメント、女性蔑視がなくならない現在と何も変わらない。

2020年4月10日、大林監督は肺がんで亡くなった。ニュース等では「尾道3部作で有名な映画監督」と紹介されていた。僕も、若いころに見た『青春デンデケデケデケ』『はるか、ノスタルジイ』などは好きだったが、大林監督の代表作は、晩年の4作品であると思っている。

東北大震災後に作られた作品、『この空の花 長岡花火物語』『野のなななのか』『花筐』そして今回の『海辺の映画

館 キネマの玉手箱』は、これまでの大林作品とは1段レベルが違う映画であった。

大震災によって、東北地方の多くの人々がふるさとを失った。ある地域は津波によって、ある地域は原発事故によって。津波や原発の恐ろしさを教訓とし、ふるさと再生へ努力する。震災後しばらくの間、日本人はそのような気持ちであったはずだ。

ところが、大震災の被害を直接浴びていない人々は、大震災を忘れ始める。原発を再稼働しようとする。復興のためと称してオリンピックを招致する。

太平洋戦争の痛みを忘れつつある日本人の姿と重なる。右傾化する政治と相まって、大林監督をして「今の空気は戦争が始まる時に近いのです」と言わしめる。

震災後、大林監督が作った4作品は、すべて戦争の悲惨さ、愚かさを伝える。『この空の花』は長岡空襲を、『野のななのか』は終戦後も戦闘が続いていた樺太を、『花筐』は出征する若者を、『海辺の映画館』では広島に投下された原子爆弾を描いている。それぞれの映画で、青春を謳歌し中断された若者を、生き生きと描いている。彼らを通し、「戦争のない世の中を作ろう」という語りかけをしている。残された時間が限られていることを悟ったように、大林

監督が焦りに焦って想念を送り込んでくる。観ている我々も、受け止める義務を感じる。それこそ、「感じ方は僕ら観客それぞれだよ」なんて斜に構えてはられない切迫感を感じる。

映画を見ている観客への信頼感。大林監督の信頼を真つ向から受け止めて、戦争のない世の中を作っていく責任を負わされる。何度も映画を見返し、監督の思いを胸に刻み込みたい。

森崎東

(享年92歳)

吉村英夫 映画評論家

日本映画史にユニークな作品群を残して森崎東は逝った。大手に依らない独立プロ方式で、自在にオリジナルをつくった。あるいは、そうするしかなかったのだが、森崎はみずからの自立性を守った。

ここでは初期の盟友山田洋次とのことを綴っておきたい。『男はつらいよ』第一作のシナリオは共作。演出は山田。湯ノ山と公害で苦しんだ磯津でロケをしたシリーズ第三作『フーテンの寅』は、シナリオが山田で、演出が森崎。…このコンビでシリーズが出発したこの意味は大きい。第一作のさくらの見合いをぶっこわすシーンはどちらがり

ードしたのか知るよしもないが、寅の非常識の痛快さは森崎的なものに思える。第三作は、森崎の演出でシナリオは山田であり、森崎はクレジットされていないが、森崎は書き直したと言っており、第三作の泥臭さとバイタリティーは森崎ならではのもの。寅が唯一さくらに對する思いを台詞にした「可愛くても妹じゃ、しょうがない」が意味深長。これは森崎かも。

『男はつらいよ』は、極端な言い方をすれば、山田が森崎的な混沌をいかに払拭していったかの過程である。「不良の失恋男」が、「失恋優等生の寅」に変貌するのに二十余年を要した。そのことでシリーズが面白くなったか、つまらないものに堕ちたかは、観る者の感性と価値観で決まる。



——ちなみに、私の答えは、両者とも合格。このシリーズの奥行きが深まったから、『男はつらいよ』第一作、その直前に、渥美清は『喜劇・女は度胸』に出ている。監督が森崎で、「原案」は山田。両作の渥美清は、泥臭い田舎者の不良性と、洗練

されたコメディアン魂が混在している。山田は、その後の『男はつらいよ』で解毒しておだやかな紳士の道化の寅次郎像に練り上げていった。對するに森崎喜劇は、怒りを含んだ混沌性と雑然性を徹底的に膨らませていく。山田は権力に對する不同意の姿勢を、非『男はつらいよ』に平行してつくった作品群に託した。その代表作は『故郷』だと私はみる。森崎は、弱者の復権と反戦反権力の姿勢を、どろくさいローカリズムのなかに盛り、それは遺作『ペコロスの母に会いに行く』にまで続く。『ニワトリはハダシだ』では反天皇制にまで立ち入っているのに驚く。大手資本では絶対に撮れなかった。

もうひとつ。森崎の兄・森崎湊が、日本の敗戦の翌日、一九四五年八月一六日に津市香良洲にあった海軍航空隊（予科練）の予備少尉として、割腹自殺をとげている。弟・東は、日本の侵略戦争を聖戦と信じて死んでいった秀才への思いを背負い込んで、その意味を考える表現者となった。それを映像にするのが森崎東の生涯だったと言っただけ。無垢の若者を死にまで追いやり、三百万人を死なせた「国家」というものへの不同意である。核戦争にまで及ぶ危険性をもつ日米安保体制を打破しなければとの政治的発言も忘れてはならない。

映画談義

保田與志彦 MuGicafe オーナー／むぎの

部活動！「えいが部」部長

桑名市旧東海道沿いにある古民家カフェ MuGicafe(むぎカフェ)は、皆さまのお蔭で6年目を迎えました。カフェなんですがいりるイベントも開催しており、夏は落語やお化け屋敷、秋には東京から劇団が来てくれたりと、人々が集まるカフェを目指しております。

ウチのカフェは金土曜日の夜だけ、夜カフェをオープンしているのですが、夜カフェの



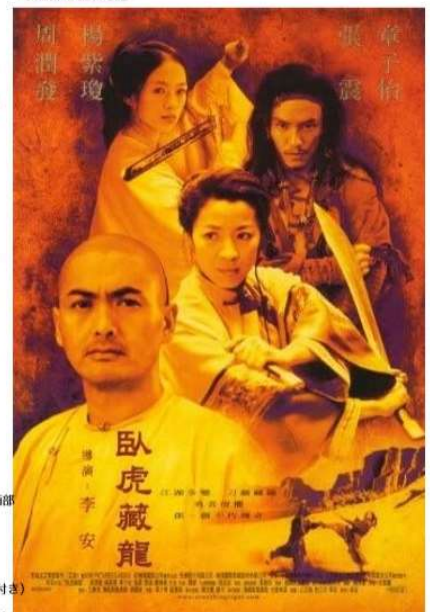
MuGicafe 屋根裏部屋で行われる「えいが部」

日には大人が集まれる「部活動」も行っております。どくしよ部・あみもの部・間取り部と部長も個人的な方が多いですが、部活動の始まりとなったのが3年半続いている「えいが部」です。スタッフのさおちゃんが始めてくれた部活動で、毎月「課題映画」を決めてその映画について語ると共に、最近観た映画や好きな映画を共有するというまったりした会。

最初は2人から始まった「えいが部」も、今では上は70代の先輩から20代の今時の映画を語る方まで、多様性溢れる会となっております。課題映画という事に「自分の好きでもない映画なんて」という方もいらつしやいます。自分では選ばない映画を観れる、課題映画があるからこそ無理にでもその映画を観る時間を作るといふ所に、私は魅力を感じています。

先日は、近くのカフェのオーナーで香港系カナダ人の Jimmy さんが参加して頂き、選んでくれた課題映画が『グリーンディステイニー』。ワイヤーアクションのはしり映画で、CGが無かった当時、迫力ある斬新な映像を目

Green Destiny
Crouching Tiger Hidden Dragon
臥虎藏龍



グリーンディステイニー

MuGiの映画部
について
います。
(1ドリンク付き)
までね！
入り参加OK
賞するわけではありません

の当たりにさせてくれました。竹林での格闘シーンは、アジアの美しさと華麗さを見せてくれます。

日本語もあまり話せない Jimmy さんが、映画という世界共通語を通じて交流出来る「えいが」ならではの魅力を再発見させて貰えました。

今後、この「えいが部」を通じた映画にまつわるお話を出来たらと思っております。

むぎの部活動「えいが部」

日 時：毎月第2土曜日 19時〜

連絡先：070-5335-9871

編集後記

■今号特集に掲載の安井氏の「映画の中のウイルス感染」に刺激されてDVDを借り『アウトブレイク』を見る。そしてウイルスの感染力のすごさとおぞましい罹患者の映像に息を呑む。安井氏は現役の医者で、しかも原書を紐解く調査魔。ウイルスの世界の分かりやすい解説書にもなっている。現下のコロナ禍においてタイムリーな情報満載です。

また、同特集の第2弾「モノクロ・スタンダード映画考」は吉村氏の映像表現の在り方を問う渾身の提言です。長文ですがご一読ください。 編集部

■私には「5人会」という老いぼれの仲間たちがいる。藤田敏人の弟も一緒だ。この中で、私に最も近かったKが病死した。かけがいのない奴だった。残った仲間を送り、私が弔辞を読み、皆で骨を拾った。香典は5人会にちなみ5万円とし、4人で頭割りした。そして、このやり方でメンバー全員が亡くなるまで継続することにした。つまり最後まで残った男は弔辞を読み5万円出すことになる。しかも本人が亡くなる時はもう周りに誰もいないのだから何もしてもらえないということだ。長生きしても割に合わない。年金の加護をいいことに、ノホホ

ンと生きているオレたち老人には、当を得たルールかも。適当におさらばしなくつちや…。 林

■久保健英のサッカーはワクワクする。瞬時の判断を全身、全脳で進む90分間、まばたき出来ない。久保はまわりに魔法をかけるようにボールを手繰り広いピッチを群遊するダンスのごとき。日本選手で今まで知らない。この華麗・緊張感がたまらない。インタビューで「サッカーが人生です」が18歳の答え。サッカー歴史の浅い日本を久保という異次元選手が変える。3歳でサッカーを始める。小学生からバルセロナ下部組織チームで活躍。今初夏、世界最高峰のスペインリーグ「ラ・リーガ」トップチームのレアルマドリッドへ。18歳で一部リーグマジヨルカヘレンタル。4ゴール4アシストで上位チーム選出を翻弄する。ヨーロッパは驚きをもって注目。一、三人のディフェンダーに寄せられてもボールを取られない。逆を突かれ転倒する相手が絶えない。9月、次のシーズンが始まる。移籍した上位チームのビジャレアルでのプレーに期待が高ぶる。

中村

■コロナ禍の中、2月から8月まで映画館に行けていない。毎回、映画情報誌でピックアップしてか

ら出かけるのが常であったが、この半年間はこれらの作品をDVDで観賞した。映画はやはり映画館で観ないと：との思いを痛感。自粛期間中はDVDのレンタル料金も通常時の半額となり、日常ではまず観ることのない韓流の大河作品を立て続けに観た。これが以外にはまってしまい、丁寧な作り方に感動させられている。 森

■今回のシネマ游人特集は「好きな映画監督」。現在編集作業中だが、意外にも「黒澤」「小津」「ヒッチコック」「スコセッシ」といった有名どころが出てこなかった。シネマ游人寄稿者の皆さんの個性が現れていて、とても面白い。

コロナウイルスの影響で、なかなか映画館に行けないので、家でお気に入りの映画監督のDVD、ブルーレイをまとめて鑑賞した。好きな映画は、何度観ても楽しい。一人で観るので、誰にも遠慮せず大きな声で笑ったり、流れる音楽に合わせて歌ったり踊ったり。至福の時間だった。

僕の推しのQT様、なんと僕以外にも推してくれている人がいた！うれいすね。 村上